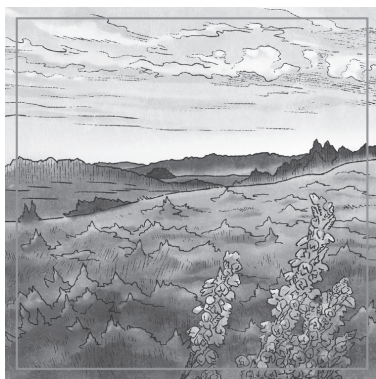


童話
ペストの村にヒースの花咲く

飯田まさみ 著



青山ライフ出版

目次

一	ロンドンからの旅人	4
二	不安	18
三	最初の犠牲者	26
四	別れ	36
五	ネリーの悲しみ	48
六	重なる不幸	62
七	説教	75
八	協力	86
九	猛威	98
十	輝く丘	111

一 ロンドンからの旅人

二〇**年、今年もまた、八月最後の日曜日になると、イングランド、ダービシャー州の山中にある小さな村、バームには、よその町や村からたくさんの人々が集まってきました。ふだんは、人も少なく静かな村の通りも、この日はかりはまるで市の日か何かのようになっています。人々は、村の教会から村外れのくぼ地まで行進し、そこで催される厳かな式典に参加するために、やってきたのです。

輪になれ 輪になれ ばらの花
ポケットいっぱい 花の束
ハクシヨーンのシヨーンシヨーン
みーんなみんな たーおれた

牧師が、イギリスの子どもたちに人気のあるこの童謡を、唱え始めました。すると、人々はみな黙とうをささげながら、今からおよそ三百五十年余り昔のバームの人たちに思いをはせるのでした。

一六××年の九月初めのある日も、今日とおなじように、ヒースの花が村の周りの丘を一面に紫がかった紅色に染めていました。ネリーは、友だちのエミリーとケイトの三人で、デール川の河原の牧草地でいつものように羊に草を食



ばら

べさせていました。

ネリーは、この前十一才の誕生日を迎えたばかりの気立てのよい女の子でしたが、幼い頃、両親を亡くしてからずっと、おばあさんと二人で暮らしていました。エミリーはネリーと同じ年、ケイトは一つ年下の、何をするのもいっしょの仲良しでした。こうして、ネリーが羊の世話をする時も、いっしょについてきてくれるのでした。

この河原の牧草地は、三人のお気に入り場所になっていました。浅瀬に続く岸辺が広い河原になっていて、木々の茂ったゆるやかな傾斜の崖に守られ、だれからもしゃまされず思いっ切り遊ぶことができるからです。春の初めには、かわいらしいデイジーが白いじゅうたんをしきつめてくれ、心ゆくまで花輪作りを楽しめます。やがて、緑がすっかり息を吹き返して野にも丘にも輝く頃には、きんぼうげが金色の花びらを細い茎の先につけて、川を渡るそよ風にやさしくゆれます。

夏も終わりがけの今時は、ちょうど、黄色ののぼろぎくの群がり咲く季節です。空いっぱいにあふれている昼下がりの日の光よりもっと明るいといつていいほど、河原一面にのぼろぎくが輝いています。

ネリーがつれてきた羊は、親子の羊でした。子羊の方は、この四月に生まれただばかりでネリーにとてもなついていました、ネリーがボニーと名付けて、ずっと世話をしてきたからです。ボニーが母さん羊と草を食べている間、ネリーとエミリーとケイトははだしになって、向う岸に渡りました。

岸の崖には、たくさんのすぐりの実が熟していました。ネリーは、おばあさんの作るすぐりのジャムが大好きでした。籠かごいっぱい取れたので、三人はまた羊たちのところへもどりました。

「もう、そろそろ帰らない？ボニーたちもお腹がいっぱいになったようよ」

「そうね。何時頃かしら」

ケイトがのぼろぎくを一本折ってきました。

「わたしが吹くわ」

エミリーが大きく息を吸って、花びらを吹きました。すると、まだ少し残り
ました。

「やっぱり、帰らなくちゃ。おばあさんが待ってるわ」

この花びらが一度で全部吹き飛ばされると、帰るにはまだ早く、少しでも残
ると、もう帰る時刻なのです。

三人は岸から上がって、村へ向いました。ネリーが「ボニーのトンネル」と
名付けた、にれやぶなの木の葉でおおわれた緑のトンネルの中に入りました。
ネリーたちは、羊をちよつと止まらせて、ひと休みしました。

その時、ケイトがささやきました。

「ねえ、向う岸の丘の道を荷馬車でやって来るのは誰？」

「見かけない人のようね」

ほの暗い木の葉のトンネルの向うにまぶしく光って見える丘を、一台の荷馬

車に乗って一人の男の人が、村の方へ進んでいます。ヒースの花の輝く丘に抱かれて、午後の明るい日射しを浴びたバームの村が、いかにも安心してきつたようにうづくまっています。ネリーもエミリーもケイトも、この男の人が、これからこの村の人々を恐怖と不安に落としいれる原因になるなどは、もちろん、この時は思いもせませんでした。

「きつと、あの人は洋服屋のブラウンさんのところへ、服地を卸しに来たのよ」
ケイトが言いました。

「じゃあ、ロンドンからやって来たのかしら。わあ、すてきだわあ」

エミリーは、いつもロンドンに憧れていたのです。彼女が人から聞き知ったロンドンには、着飾った貴婦人たちの集まる立派な宮殿があり、大勢の人々が行きかう、美しい店の並んだ大通りのあるとてもはなやかな都でした。

「一度はロンドンへ行って、王様やお妃様に会ってみたいわ」

「まあ、そんなことできるわけないでしょ。ふつうの人は、宮殿の中には入れ

ないのよ。そうそう、小ねこになったら、入れるかもしれないわ」
ケイトが笑ってからかいました。

「ねこちゃん ねこちゃん

どこ行ってたの

女王様にお目にかかりに ロンドンへ

ねこちゃん ねこちゃん 何してきたの

女王様のいすの下

ねずみをおどしてやりました」

「まあ、ケイトったら、ひどいわ」

村の方へはやして逃げるケイトを、エミリーは追いかけて行きました。ネリーも、お母さん羊に甘えていたポニーを急がせて、村へ向いました。ケイトとエ